

「松戸市立病院は、なぜ、600床以上の病床が必要か？」の疑問に答えます

1) 松戸市立病院は、千葉大学付属病院に匹敵する高次機能を備えた病院である。

救命救急センター（最重症者を扱う病院）、地域がん連携拠点病院、小児医療連携拠点病院（小児科の中核病院）の3指定を千葉県から受けている病院は、千葉大学医学部付属病院(835床)と、松戸市立病院(613床)、旭中央病院(956床)のみです。

2) 松戸市立病院は、東葛北部医療圏・松戸市の唯一の高次中核病院である。

東葛北部医療圏には、130万人が居住しています。この医療圏で、高度な医療を実施しているのは、松戸市立病院しかありません。また、年間、松戸市立病院に、松戸市の2次待機病院（千葉西病院、新東京病院など）から100件を超える重症患者が救急車で搬送されています。まさに、松戸市立病院は、東葛北部・松戸市の最後の砦なのです。

3) 松戸市立病院は、急性期総合病院と小児周産期医療センターの2つの機能を持つ

松戸市立病院は600床あるからこそ、急性期総合病院として独立した優秀な救急部を持ち、かつトップレベルの小児周産期医療が実践出来るのです。450床では、この2つの機能の医療の質を保つことは出来ません。

4) 松戸市立病院の医師の多くは、病床規模が縮小されれば、離職する

市立病院の医師達は、高度医療を実践して、医療の最後の砦を守りぬくことに、生き甲斐と誇りを持って働いています。病院の規模が縮小され、中核病院の役割が果たせなくなれば、難病患者や重症の交通外傷の患者達を救命すると言った専門医の生き甲斐を失い、多くは離職していくでしょう。現に、市立病院医師の7割の医師が、現地建て替えの中で、450床に削減されるなら、病院を辞めざるを得ないと言っています。医師がいなくなれば、松戸市立病院は中核病院としての機能を失い、地域全体の医療に甚大な影響を与えるでしょう。

5) 財政的見地からの600床が必要

中核病院としての診療加算が働き、病床が多くなれば、その分、増益になります。一般に、全国の中核病院では、550床以上になると、経営が黒字化するといわれています。

6) 将来、松戸市は、入院患者が急増する。

昭和50年頃から、千葉県には、日本でも有数の流入人口がありました。これらの流入した人々が高齢化する中で、千葉県は、今後20年間に、全国でもトップクラスのスピードで、高齢化が進展するといわれています。この東葛北部（松戸市等）・南部地区(市川市等)は、

その中でも最も高齢化率の進展が早く、入院患者が高齢者を中心に急増します。このような背景から、この地域の中核病院である松戸市立病院の病床数縮小は将来に禍根を残す結果となってしまうのではないかと危惧しています。

7) 医療・介護は今後、成長産業であり、雇用を増大させる。

政府は、今後の成長分野として、医療・介護分野を規定しています。松戸市市立病院は、その分野の中心に位置するものであり、**松戸市の経済活性化**のためにもこの病院の規模を縮小するべきでないと考えます。